

「西国立志編」小考

—— 立身出世の内実 ——

榎 林 澁 二一

一

明治維新後の一時期は、ある意味では一種の可能性の時代であった。四民平等の名のもと、才あるもの、学あるものが勝ち、なき者は敗れてゆく。まさに自由と解放の時代であった。有識者、有能者は新政府に招聘され、時を得て自在に腕をふるい、高官となり、逆に才なきはふり捨てられてゆく。新しき国家はひとしきり人を求めていたのである。そこに二つのことがあったと言つてよい。一つは、自由と解放の時代、今一つは、志の時代と言つてよい。「乃公出でずんば」といった意識の横行、遅れて出発した日本に、阿片戦争などで見た中国の二の舞をさせたくないという危機感、その中、早急に西欧化近代化をはかろうとした。そこには、一種の運命共同体のようなものがあつたと言つてよい。のち、夏目漱石が「明治の精神」（大3・4）8

「こころ」を記したとき、そういった運命共同体のようなものが、この秀れた知識人の内部に脈々と流れていた。「普請中」（明43・6）を記す森鷗外の意識も同様であろう。ともに国の建設にかかわつた昂揚感が内在する。それらの意味で、維新直後は、凄じい可能性の時代であつた、そしてそれは、ほんの僅かの期間で、すぐに潮のひくように変りいくものでもあつた。

すでに言いつくされてはいるが、そういった解放の意識を支え、いやむしろ積極的に人々を導いていったものが二つあつた。いずれも当代きつてのベストセラーとして存し、人々は争つて読み、自らの指針とした。福沢諭吉「学問のすゝめ」（明5・2）9・11）、S・スマイルズ著、中村正直訳の「西国立志編」（明3・10）4・7）である。²²

有名な「天は人の上に人を造らず」で始まる前者は、人間の平等、学問の尊重、国家の平等、一身の独立、形式道徳の否定などを説いて、ひとしきり清冽であつた。そこで

はあくまで自主自尊を重視、そのことは個人だけでなく国家や社会に及んだ。論の中核はあくまで古き社会や古き制度の破壊、新しき社会の建設にあり、それらすべて個人の努力次第であると声高に主張した、恐るべき解放、破壊の書であった。そして、事情は「西国立志編」として同様であった。英国の作家 Samuel Smiles の「Self-Help」の訳として、四民平等の中、個人の努力によって、自在に立身出世ができることを、西洋の成功者譚を集めて説いた。中村正直のこの書に示された様々なる出世の様態は、かつての階級社会壊し、新しい可能性と夢を与えるものとして、明るい展望を人々に与えた。個人の努力、充実がそのまま国家の充足に連なるものとして、人々は実に明晰に己れの未来の姿を予測することができるようになった。

しかし、周知のように、この明るさがそのまますぐに、一つの落し穴をもたらしてもいた。論吉の文はすぐに次のようにも続けている。「されば、前にも云ふ通り人は生れながらにして貴賤貧富の別なし、唯、学問を勤めて物事をよく知る者は貴人となり、富人となり、無学なる者は貧人となり下人となるなり」。ここには、階級差別そのものに対する否定はない。天賦なる身分差という旧階級の破壊は行なう、しかし、すぐに新たな階級の存立を認めているのである。ここには、確実に再生産される権力の構造があった。差別壊しによる差別作りである。再生産される差別を

どう考えるか、これはただに、論吉の問題だけにかかわるものではなかったかもしれない。

「西国立志編」の場合も同じであった。個々の充足が国家の充足にとりつた大前提は、結果として、その方向への価値の問題に転移する。冒頭は次のようである。

「天ハ自ラ助クルモノヲ助クト云ヘル諺ハ、確然（シカト）経驗（タメシココロミ）シタル格言ナリ、僅ニ一句ノ中ニ、歴ク人事成敗ノ実驗（タメシ）ヲ包蔵（コメテアル）セリ、自ラ助クト云フ事ハ、能ク自主自立シテ、他人ノ力に倚ザル事ナリ、自ラ助クルノ精神（タマシヒ）ハ、凡ソ人タルモノ、才智ノ由テ生ズルトコロノ根原ナリ、推テコレヲ言ヘバ、自ラ助クル、人民多ケレバ、ソノ邦国、必ズ元氣充実シ、精神強盛ナル事ナリ、」（注、左ルビを（）に入れた。以下同）

つまり、そこで大切なのは各個の解放と努力であった、国家の強盛は結果としてある。ところが、いつか、各個が身を慎み、勤勉、努力すれば、国や社会の充実になり国家強成の原動力となるといった論に移行する。個の解放充実のはずが、国家や社会中心の発想に変わってゆくのである。結果として、個の修身、克己が最大の価値となる。修身齊家治国平天下をとなえる旧倫理と重なってくるのである。これは、本質的な意味での人間解放や人間改革ではない。いつか国家という枠内にはまった論理となるものである。

古き体制壊しが、奇妙なことに、結果としての古き体制擁護へ一直線に繋がってゆくのである。どこかに一つの屈折があった。しかし、こういった内実をもつが故もあつてか、これらは実にスムーズに、明治新体制の中に入り込んでいった。二つの解放の書、破壊の書は、また、新権力構造の構成と維持の理念の書にもなりうるし、なりえたところもある。

ところで、本稿の目的は、それらの指摘にあるのではない。右に見たような解釈の変容だけでなく、実は、「西国立志編」自身の内実⁽⁴⁾に、そういった一つの方向が内包されていたところがある。正直自身がそれを意識していたかどうかは不明であるが、訳者正直の初期なる発想の中にそれらがあり、「西国立志編」の中に巧みに織り込まれていた気配があるのである。その内実について、少し追ってみてみたいというのが、本稿の意とするとところである。

一一

「西国立志編」は、周知のように、中村正直が英国留学から帰るとき、友人のフリーランドから、S・スマイルズの「自助論」(Self-Help)を贈られ、帰途それを読み感動、帰国後、翻訳、刊行したもので、たちまち、大ベストセラーとなり、明治大正を席卷したものである。

ところで、のち、大正五年一月、古城栗原元吉訳、『新訳西国立志編 一名自助論講話』(東亞堂書房)なる書が出版されている⁽⁵⁾。訳者栗原古城は、次のように「序」する。

原書「セルフ・ヘルプ」は一八五九年の刊で、「驚くべき勢」で世界各国に普及、一九〇八年までに五十六版に達し、「其普及の勢」は今後とも衰えるところがない、各国に翻訳書が出ているが、日本でも「故中村正直先生」が「西国立志編」として訳出、「当時の教育ある階級の人士で、苟くも本書を読まざるもの無く、而して読んで大なる感化を受けられないものは一人も無かつた、」と。

しかし、今般、その改訳を期して、古城は次の二点を言う。一つは、中村正直の翻訳は、「当年に於ける名訳」であつたが、「日本の文体は当時から見れば正に一変し先生の採用した如き漢文調^{ぶんごう}は今日多数青年の読むを難しとする所である。」「今日此良書の生命を更に復活せんとするには、今日多数の人士に読み易き文体と体裁とを備ふる事が、何よりの急務である。」ということ、今一つは、「旧西国立志編に略してあつた箇所をも悉く挿入して、其全篇を移植した次第である。」ということである。彼は、「固より完訳とは云へぬが、此良書の効果を更に十分ならしめんが為めには、訳者は聊か努力を払つた所存^{ところぞん}である。」と自賛する。口語訳にして完訳、それにより、この「復活」をはかったと言うのである。

かくして刊行されたこの『新訳西国立志編』を正直訳とを比べた時、幾つかの興味ある問題が浮上してくる。その大きな一つが、先に見た権力構造接近の内在の問題である。もとより「Self-Help」原書と比較すれば、事はより精確であろうが、今は、明治という嵐の時代が終わり、大正四年、新しき時代に、この書の「復活」を志した栗原古城とその訳に興味もある。両書を対比し、その違いと意味について考えてみたい。ちなみに、スマイルスの原書は一八五九年初版が発行され、一九六六年改訂されているが、正直も古城もその改訂版に依っている。以下、古城の言及した問題によりつつ、正直訳と古城訳とを比してみる。

まず、古城の言う「文体と体裁」の問題について考えてみたい。両者を対比して、ひとときを目立つことは、古城の自賛にもかかわらず、正直の訳書の方の見事な工夫である。幾つかあげられる。違いとしてまず、第一に取り上げたいのは、章立ての用語の問題、更には、その手法についてである。試みに、全十三に分かれる目次について比べてみよう。次頁の表、上が正直訳、下が古城訳である。

正直は「十三編」、古城は「十三章」に分けているが、その編章の題目の訳し方に、すでに両者の姿勢の違いがある。正直は、第三編を除いて他はすべて「論ズ」としている。そこには、全体を通しての、西欧諸科学、諸文化の紹介、啓蒙の姿勢が際立っている。対して、古城訳はあくま

で事の様を客観的に叙そうとしている。悪く言えば羅列的である。パトスとロゴスの対比と言おうか、正直訳は人々を導く規範提示の意が強い。

一 違いの第二は、その本文の記述手法についてである。原書における各章の内容は、小見出しなしの書き流しであるが、正直はそれを、各編とも、明解な小見出しで簡潔に整序している。対して古城は、原書にあるように、目次の項のみ小見出し分けを行っているが、本文は原書通り、すべて書き流しである。正直の、各編の中に施した小見出し立ての工夫は見事で、それが、この書をいかに読みやすく、理解しやすくしているか、この訳書最大の功はその点にあると言つてよい。ちなみに、正直訳の第二編内の小見出しと、古城の第一章の目次に記された小見出しの一部を例示してみよう。繰り返して言うが、正直はこの小見出し通りに本文を整序し訳している。古城は、目次にのみこの細分はあるも、本文はすべて、小見出し分けなしの書き流しである。すべて十三章にわたつてそうである。

まず、正直訳の各小見出しについて。

一 第一編 邦国及ビ人民ノ自ラ助クル事ヲ論ズ

二 自ラ助クルノ精神

三 人民ハ法度ノ本

四 国政ハ人民ノ光リノ返照ナリ

五 邦国ノ盛衰

編	中村正直訳	章	栗原古城訳
一	邦国及び人民ノ自ラ助ケル事ヲ論ズ	一	自から助くること ― 国民としても個人としても
二	新機器ヲ發明創造スル人ヲ論ズ	二	工業界の先進者 ― 發明家と製産者
三	三陶工ノ伝	三	三大陶工 ザウツト、ベツチケル、ウエツ
四	勤勉シテ心ヲ用ヒ恒久ニ耐テ業ヲ作ス事ヲ論ズ	四	勤勉と忍耐
五	幫助即チ機會ヲ論ズ、并ニ莖業ヲ勉修スル事ヲ論ズ	五	援助と機會 ― 科学の研究
六	莖業ヲ勉修スル人ヲ論ズ	六	芸術界の努力家
七	貴爵ノ家ヲ創タル人ヲ論ズ	七	勤勉と貴族
八	剛毅ヲ論ズ	八	精力と勇氣
九	職事ヲ務ムル人ヲ論ズ	九	実務家
十	金錢當然ノ用ヒ及ビソノ妄用ヲ論ズ	九	金錢 ― 其の利用と濫用
十一	自ラ修ムル事ヲ論ズ并ニ難易ヲ論ズ	十一	自己の修養 ― 其容易と困難
十二	儀範又曰典型ヲ論ズ	十二	実例 ― 模範
十三	品行ヲ論ズ、即チ真正ノ君子ヲ論ズ	十三	品性 ― 眞の紳士

五 シーザリスムノ一派ト自助ノ説ト反対ナル事ヲ論ズ
六 大巨自立ノ事ヲ論ズ

(中略)

二十四 勤勉ニ非レバ百事ノ工妙ニ至ル能ハザル事

二十五 富貴ノ人マタ自動ノ力ヲ要ス

二十六 富貴ニ生レテ征陳ノ苦ヲ甘ズル人

二十七 富貴ニ生レテ有名ノ学士トナレル人

(中略)

三十二 窩囟衛士ノ論并ニ多克未爾ノ事

三十三 多克未爾他人ヨリ助ケラ得タル事ヲ招認スル事

三十四 人ハ自己ノ身ヲ以テ第一ノ帮手トナスベシ

対して、古城訳の目次は次のようである。

「第一章 自から助くること

一 国民としても個人としても

自から助くる精神——制度と人——政府は国民の個性を

反映す——帝王神権説と自助——ウキリアム・ダーガンの

独立論——(中略)——有用顕貴の人物と成るには勤勉が

肝要——富豪だとして必しも怠惰でない——其実例——(中

略)——ウオーツウオースの自信論——ド・トクエヴキユ

——最も有力な補助者は自分自身である。」

原書の目次小見出しと正直の小見出しとは、必ずしも同

一ではない。しかし、このように対比してみると、正直の

論脈整序や小見出し仕立の本文組みなどは、際立ってくる。

第三の違ひは、正直の施した周到な語釈への配慮である。

周知のように、正直訳は、明治初期、よく行われた、いわゆる文選読みを行っている、すなわち、使用した漢語訳が

難解と見るや、その右に読みのルビを、左に意味のルビを

施している。更に、事に応じて、人物や事項の説明を頭注

に記している。そこには、明らかに、直訳を志した古城と

違ふ語感覚や翻訳に対する姿勢がある。例えば、第一編の

第三節冒頭から少し引いて対比してみよう。

正直訳は次のようである。

「三 国政ハ人民ノ光ノ返照ナリ

邦国ノ政事ハ、特ニ人民各自一己(メイメイヒトリヒトリ)

ノモノ会集(アツマリ)シテ放トコロノ回光返照(カヘリ

ウツルヒカリ)ナリ、蓋シ人民ハ政事ノ実体(ホンタイ)ニ

シテ、政事ハ人民ノ虚影(ムナシキカゲ)ナリ、讐バゴ、

ニ一国アリテ、人民ノ品行(ギオウジヤウ)劣悪(ラトリテ

アシキ)ナレバ、一時ソノ政事優美(ケツコウ)ナリトモ、

幾何モナクシテ、ソノ政事必ズ退ゾキ下リテ人民同等(オ

ナジホド)ノ位ニ至ルベシ、」

左ルビは読者の、学の有無や老幼のいずれにも耐えられ

る。古城訳は次のようである。

「一の国民を支配する政府は、畢竟其分子たる個人個人

の反映と見て差支無い。人民よりも進んだ政府は、人民と

同等の程度に引下げられることを免れぬ」

口語体としては、古城訳が読み易いが、正直訳に啓蒙性に富むところがある。文章も正直訳の方に格調とリズムがあるようである。試みに、今一例、終りに近い第十二編第一節の冒頭部を挙げてみる。

「一 家裡ノ教化最モ緊要ナル事、并ビニ家国同一ナル事

好キ儀範（ギヨウジヨウノテホン）ハ、舌ナクシテ甚ダ勢力アルノ教師ト称スベシ、蓋シ人生實際ノ学問ハ、行為（シワザ）ノ上ニ在リ、故ニ好キ儀範（テホン）ノ、人ノ感移スル事、言語ノ比スベキニ非ズ、教訓ノ善ナルモノハ、固ヨリ斤両（メカタ）アリテ重ンスベシ、然レドモ儀範ノ善モノアリテ、コレニ伴ハザレバ、ソノ人ニ入ル事必ズ深カラズ、命令（イヒツク）訓敕（ラシヘ）ハ、人生ノ行クベキ道路ヲ指シスニ過ズ、好キ表様（テホン）ヲ立ツル人ハ、コレト親灸シ附近スルモノヲシテ、自ラ習慣シテコレト共ニ化セシムルナリ、一

「実例は舌を以て人間に教へるものには無いが、最も有力なる教師の一人である。実例は行為を以てする人類の実践学校で、而も行為よりは毎も必ず有力である。訓言は吾等に道を示すか、實際吾等を進ませるものは、習慣によつて我等を導き、事実に於て吾々と共に存する沈黙し連続せる実例なのである。」

前者が正直訳、後者が古城訳である。正直訳にある、各

編の見出しや左ルビによる語釈の存在は、論の方向や内容を鮮かに示している。文体も前者がリズムがあり口誦にたえる。ここには、「漢文調」というだけで古くなったと言う古城の訳の方が、逆に読み難さを感じたりもするのである。明治維新时期、昂揚した若者の立志の意識に、この「漢文」体のもつリズムと格調はいかにもふさわしいものであつたらうし、その格調は今でも読みに耐えるものがあるようである。

三二

次いで、古城の言う完訳の問題について考えてみたい。古城は「旧西国立志編」に「略してあつた箇所」を「悉く挿入し」て、「其全篇を移植した」と言う。正直は何を略して訳したのか、それは何故か、意図するところがあつたのか。

ために、先に、全十三編（章）に分かれるこの書の訳出の量関係について大略、眺めてみた。それが次表である。

「其全篇」を「移植」したという古城訳を基準に、その量関係を比べてみると、明らかに幾つかの違いが生じている。もともと、原書に忠実に訳したのであるなら、各編（章）の量関係の比率はほぼ同等でなければならない。

（正直訳に各編小見出しの節があることは先に記したが、今は

(中村訳は、博文館版《明27・7、大2・8三十版》によった。)

編 号	内 容	中 村 正 直 訳				栗 原 古 城 訳				量 差 %	
		小見出し (項目)	頁 量	関 係 量	%	小見出し (目次のみ)	頁 量	関 係 量	%	正直	古城
一	自 助	34	1~48	48	9.0	40	1~36	36	6.3	2.7	0
二	新 機 器	15	49~95	47	8.9	35	37~87	51	8.9	0	0
三	三 陶 工	4	97~115	19	3.6	28	88~121	34	5.9		2.3
四	勤 勉 と 忍 耐	22	117~151	35	6.6	24	122~155	34	5.9	0.7	
五	援 助	36	153~203	51	9.6	36	156~203	48	8.4	1.2	
六	芸 術 界	16	205~236	32	6.0	41	204~272	69	12.1		6.1
七	勤 勉 と 貴 族	6	237~249	13	2.4	15	273~302	30	5.2		2.8
八	剛 毅	27	251~298	48	9.0	33	303~360	58	10.1		1.1
九	実 務 家	32	299~346	48	9.0	42	361~397	37	6.5	2.5	
十	金 錢	28	347~382	36	6.8	38	398~432	35	6.1	0.7	
十一	自 修	43	383~449	67	12.6	51	433~498	66	11.5	1.1	
十二	儀 範	20	451~485	35	6.6	25	499~530	32	5.6	1.0	
十三	品 行	41	487~538	52	9.8	41	531~572	42	7.3	2.5	
	計	324		531		449		572		(8)	(4)

これも内容量の中に入れて考えた)。差異の原因は、古城の言うように、正直訳の方にあつたようであるが、その違いの内実とその意味について少し考えてみたい。

表示したように、二つの量関係を比べて、明らかに違いがある編、章について見るなら、正直訳に多いものは、第一編「自助」、第四編「勤勉と忍耐」、第五編「援助」、第九編「実務家」、第十編「金銭」、第十一編「自修」、第十二編「儀範」、第十三編「品行」の八編であり、古城訳の方が多いのは、第三章「三陶工」、第六章「芸術界」、第七章「勤勉と貴族」、第八章「剛毅」の四章で、第二編「新機器」は等しい。その中、際立って正直訳に少ないのが、第三、第六編、すなわち芸術関係であり、逆に、第一編「自助」、第九編「実務家」、第十三編「品行」などが多い。そして、そこにすでに早く施された中村正直の意図が見てとれる気もする。意図的というより、潜在的なものであつたかもしれないが、その違いは、すなわち、維新後の新しき国づくり⁸に正直がまず必要と考えたのは、自助の心と品行、そしてその実務実行であつたかもしれない。対して、文化や芸術的教養などは、次なるものであつた。加えて、いかにも正直らしさを思わせるのは、第二編「新機器」などの科学、工業関係にあまり力を注いでいないことである⁹。とりわけて力を省いたというわけではないが、より問題にしたかったのが、「克己」や「道義」であつたのである。

ろう。

少しその具体を追う。まず、第三、六編の省筆状況について。第三編「三大陶工」では何をどう省いていたか、大略比較すると、三人の陶工を紹介した大きな筋立ては変わらない、しかし、そこに加えて描き出されている陶工史や他の個々の陶工達の名、その業歴など、論の厚みのあるところを思いきって削いでいる。明らかに、そういった芸術的成果等への関心の乏しさがある。そこでの関心はあくまで、彼らがいかに勤勉に功をなしたか、個々の自修、克己の様である。例えば、第三章のタイトル脇に配された次のような一文は正直訳には省かれている。

「美しく白い色の^{チシ}湧薬をつけた陶器を示されたのは二十五年も昔のことでした。其時私は粘土に関する知識は皆無と云ふ程でしたが、其以来闇を求むる人の如く熱心に^{チシ}瑛瑛質の研究に従事しました。ベルナル・パリツシー」

美の価値への関心は乏しい。
よりはつきり削除が見られるのは、第六編「芸業ヲ勉修スル人ヲ論ズ」である。ここで削除された大要は、一つに芸術家の具体的な創作小挿話類であり、次いで、個々の努力話でなく、天成持っていた才能を開花していくといった才能重視の例話類である。例えば、第六編、第五節か六節のあたりに入るべきであつた「リチャード・ウエルソン」の伝記など全部省かれている。幼少より絵画の才あり、一

日、画家ツカレリを訪い、待つ間の退屈さに「其室の窓から見える景色」を写生、ツカレリそれを見てその才に驚き、「風景画」をすゝめる、ウキルソンそれを聞き入れ、熱心に勉勵、ついに「英国第一流の風景画家と成つた」といったような、才能に重点をおいた挿話類が削られてゐる。才よりも「勤勉」や不屈の努力を重んじた傾きがある。また、芸術論や芸術そのものの描出を削り、更には、「建築家」関係の例話類も削つてゐる。

こういつた外なる削除に対して、内的な意味づけや解説に変化を加へたものもある。少し際立つた変化があるのが、有名な、第十一編「二十四 稗官小説ノ害」である。正直は、この項目を取り立て、「稗官小説」、いわば通俗小説的なものを厳しく論難してゐる。⁽¹⁰⁾古城訳のその部分とその論調を比較してみよう。正直訳は次のようである。

「二十四 稗官小説ノ害」

稗官小説ハ、人ノ戲笑ニ供シ、ソノ心志ヲ蕩散(ト)ラカシチラス)スルモノニシテ、教養ノ事ヲ穢(ヌ)事、コレヨリ、甚シキハナシ、今世ニ、カクノ如キ書ヲ著ハスモノアリテ、時人ノ好ニ投ゼント欲シ、卑俗ヲ嫌ハズ階謔(オドケ)ヲ避ケズ、人倫ノ法ヲ破リ、上帝ノ律(オキテ)ヲ慢ルコト、真ニ厭ヒ悪ムベキナリ、(中略)潤○斯大林(スタリリン)マタ曰ク、稗官小説、遍ク世人ヲ害シ就中(トリ)ワケ)心志未ダ定マラザル人ヲ害スル事、疫癘ヨリモ甚シ、恰モ水ヲ臭壞(ク)サラス)ス

ル悪虫ノ、飲ム者ヲ病マシムルニ似タリト云ヘリ」

古城は次のようである。

「教育を汚辱するもう一つの方法は、之を以て智力上の放蕩と為し、娯楽とすることである。現今の時代には此悪趣味に迎合する人は頗る多い。今日の俗文学に色々な形で現はれてゐる軽佻な刺激的な調子は、殆んど正気でないと思はれる程に歡迎されてゐる。斯の如き公衆の趣味に迎合するには、坊間の書籍や雑誌は、自然に刺戟を多くし、口当りを善くし、滑稽を加へて、野卑な言語をも排斥せず、人間の法則も神の法則も之を無視するやうにしなければならぬ。(中略)ジョン・スタアリングも亦同一の精神で斯う述べてゐる。『雑誌や小説は、現代の総ての人間に対して然うだが、殊に精神の未だ定まらず、或は精神のこれから出来掛らうと云ふ人々に対しては、埃及の熱病と同じ役目を果し、又は飲料水を腐敗させたり、室内を犯したりする毒虫のやうな働きをするものである』と。」

少し長くなつたが、正直の芸術観、そして遊惰なる文辭拒否の姿勢がここにある。古城訳の前半でわかるように、これは教育論の一部であつた。正直はそれを、「稗官小説ノ害」と、一つの特立事項に仕立てあげてゐる。古城訳「精神のこれから出来掛らうと云ふ人々」を対象とするのに対して、正直は「遍ク世人ヲ害シ」としてゐるのである。

四

逆に、正直訳の方が量的に多いもの、あるいは、正直によつて意識されたものはどうであろうか。これらについて、正直訳において、特別に加えたものがあるわけではないようである。前記のように、各編の小見出しの量の多いものが、必然的に量が増えたところもある。

しかし、実は、古城訳にないこの各編における小見出し群が、正直の重要な意志の現われでもあることが、改めて思い知らされる。それらは大きく二つの仕事をなしているようである。一つは、これらが、この立志にかかわるテキストの索引の役目を果しているということである。読者は、自らの志にあわせ、適宜、その欲する所を読む。志向する思想、道徳、倫理、志向する職種やジャンル、志向する業種や志のありかに応じて、随時、引き出して読めるのである、見事な編成と言える。今一つは、その小見出しそのものが、一つの格言の役目を果しているということである。

本文全てを読む必要はない、その小見出しの目次を随時読むことによつて、志のありかや克己のありか、方法などが解かるのである。例えば、「第十三編 品行ヲ論ズ、即ち真正ノ君子ヲ論ズ」の中より、摘記するなら、次のようである。

「一 品行ハ人ノ有ル最貴ナル物」、「四 品行ハ勢力ナ

リ」、「六 人皆品行ヲ修メ善クスル事ヲ目的ト為スベシ」、「八 真実ハ品行ノ骨子」、「十五 他人ヲ待スルニ温和ニシテ礼アルベキ事」、「十七 中心ノ忠愛、外貌ノ礼儀」、「三十八 君子ハ己ヨリ弱キモノヲ凌虐セズ」、「三十九 君子ハ人ニ恩恵ヲ施セドモ徳色ナシ」、「四十 君子ハ己ヲ棄テ人ニ譲ル事」などなど、まさにこれらは格言として立っている。そして、読者は、己れの生の糧として読んだであろう。正直訳の量的なふくらみの内因の一つはここにあった。量の問題とは少しされるが、意識にかかわりつけそえたのが、正直の訳語とその内実の一つの方向が見られることである。例えば、先に引いた、第一編「三 国政ハ人民ノ光ノ返照ナリ」の末尾は次のようである。

「邦国ハ、特ニ人民各自一箇(メイメイヒトツ)ノモノ、合併セル総名ナレバ、所謂、開化(ヒラケ)文明ト云フモノハ、他ナシ、ソノ国ノ人民男女老少、各自ニ品行(ギヤウジャウ)ヲ正クシ、職業(カゲフ)ヲ勉メ、芸事(ゲイジユツ)ヲ修メ善スルモノ、合集(ヒトツニマトマリ)シテ開化(ヒラケ)文明トナル事ナリ、」

対して、その個所の古城訳は次のようである。

「即ち最高の愛国心とか慈悲とか云ふものは、法律を変更したり、制度を改新したりすることよりも、寧ろ人々をして、其独立不羈な個人的行為によりて自分自身を向上進歩せしむるやうに傍から補助と刺戟とを与へることであ

る。」

明らかに、正直訳には、日本の開化、開明を志す正直の心がある。「愛国心」の問題を「開化文明」と時の問題に切り変えているのである。今一例、第一編「八 英人自ラ助クルノ精神アル事」から、その末尾の一部を引く。

「且ツ人民ノ生涯モ、マタ歩卒ノ戦闘（タタカイ）ニ比ス（クラブ）ベシ、ソノ姓名伝ハラザルモノトイヘドモ、伝記（カキモノ）ニ名ヲ留ムル大人豪傑ト、共ニ世ノ開化（ヒラク）文明ノ上進（ススムユキ）ヲ助ル事、甚ダ多キナリ、」

「されば伝記も何も書かれない多数の人々も、歴史の上に其名の輝いてゐる好運な偉人と同様に、文明と進歩の上に多大の影響を与へた訳である。」

後者古城訳の「文明と進歩」が、前者の正直訳では「開化文明」となっている。大正と明治初期との意識の位相であろうか。右につづく一節は、よりそれを物語る。

「至微不至民ト雖ドモ、ソノ職事ニ勉強シ、平生ノ為スルトコロ、正直、忠厚、節廉ニシテ、他人ノ儀表（テホン）トナレバ、ソノ国ノ治化ヲ裨（ヌク）ルコト、独り当世ノミナラズ、後代ニマデモ及ベシ、」（正直訳）

「卑賤な人でも勤勉と真面目と正直との模範を其同胞の前に供したならば、密（シク）に現在のみならず、将来永く国家の福祉に貢献するのである。」（古城訳）

「国ノ治化」と「国家の福祉」といった、その論の志向するところ、一見、違いは僅かのように、実は意識も内包するところも大きな差異があったようである。逐語訳を志す古城と、開化、開明を志す正直との違いとも言える。

五

かく対比してみると、正直訳の「西国立志編」の姿形が際立つてくる思いがする。正直は、必ずしも、芸術を否定していたわけではない。柳田泉氏は、「西国立志編」中、多くの「西洋文学殊に英国文学の知識」がこの書と共にかなり豊富に移入されているので、「この点からだけでも、『立志編』の貢献は相当重要である」と論じられている。^[1]

確かに、その功に大なるものはある。しかし、若き明治を領導したこの書に、すでに早く、原書の中村正直なりにの変更、方向づけがあったことは、この書の深甚なる影響を考えると、心改まる思いがしたりもする。スマイルスの言う自主自助の意の直叙が、とりわけ、その当時、必要ではなかったか。

この書の、後代への影響、そして、この書の当時捉えられていた性格を現す一例を、最後に挙げておく。巖谷小波「当世少年氣質」（明25・1）の中の一話である。海野小太郎は書が巧み、「神童」と称せられる。両親も喜び、有

名な書家を師に求め修業させる。小太郎や、慢心になる。

貴族院議員高山、ある日、呼びて書をかかすが、書きあげたものを拒否、「書家」もよいが「堂々たる男子」、もつと「気の利いた事」をして「天下の為に」尽くせと厳しく諭す。小太郎、改心の心を示すに及び、次のように終わる。

「《ウン、流石！ それでこそ神童ぢや。私の云ふことが解つたら、印材の代りに私が遣る物がある。》」

云ひながら立上り、書棚の隅から洋綴の本を取り出して、小太郎の前へ置いたを。頂いて其端を見ると、黒革に金字で「『西国立志編』」

少年の芸道への道を拒否、改心した志のありかを祝し、「西国立志編」を贈るのである。そこに正直の心の余映もあったか。「西国立志編」が、維新後、読まれ続けた主因の一つはそこにあつたかもしれない。志は社会的出世にあるも、そこに自らなる粋があつたのである。

「夜店はや露の西国立志編」(大14・11『ホトトギス』)

川端茅舎の句。大正も末年、夜店で古書を売るのは、夢を追う若者か、それとも、志を果さなかつた老人だらうか。そして、その時の「西国立志編」の役割は。露とは。

注

(1) 悲哀を例えば、国木田独歩「富岡先生」(明35・7)などに見る。また、平岡敏夫氏「ある属吏の命運―北村快

蔵の非職と透谷―」(昭61・3『文学』)などが、そういった世界を追つた一例である。

(2) 対して、福沢諭吉「西洋事情」、内田正雄「輿地誌略」、正直の「西国立志編」を「明治の三書」として、明治初期を代表するもある(柳田泉「西国立志編」解説(昭13・7 富山房)など)。「西国立志編」はいずれへも入る。

(3) 成立について、大久保利謙氏「中村敬字の初期洋学思想と『西国立志編』の訳述及び刊行について―若干の新史料の紹介とその検討―」(昭41・1『史苑』)が詳しい。参照。

(4) すでに早く、柳田泉氏は「たゞの翻訳といはんより、敬字がスマイルズの原書をかりて日本の書物に作り直したものだといった方がよい。」(注2柳田解説)と記している。

(5) 藤原暹氏に、他訳との比較、「西国立志編」原書との比較等、精細な論がある。「日本における S. Smiths『自助論』受容の思想的研究(I)―(IV)―」(昭57・12、58・7、59・6、60・6『アルテス リベラレス』)参照。前記注5藤原暹氏の論(特に(II))に、原書との対比の表などがある、参照。

(7) 小林雅宏氏「『西国立志編』におけるふりがなの使いわけ」(昭57・9『専修国文』)に詳しい論がある。参照。

(8) 例えば、久米邦武編「特命全権大使 米欧回覧実記」(明11・10)には、凄じい科学文明等や機械類への注視がある。姿勢の違いの大きさと言えようか。

(9) 「三大陶工」について。陶工については、すでに早く戯作化されている。それらの意味について平岩昭三氏「西

国立志編』と『其その粉色いろはな陶器とうき交易』の周辺―明治初期における西歐文化受容の一面について―(昭48・12『學術研究』)に詳しい。正直の姿勢と比べたとき、興深い。

(10) 「稗官小説」について、藤沢秀幸氏の、原書と対応した論がある(「中村正直の文学観―『西国立志編』第十一編二十四をめぐって―」(平5・12『清泉女子大学紀要』)、参照。

(11) 前述(注4)参照。あわせて、柳田泉氏には『明治初期の文学思想上』(昭40・3 春秋社)にも詳しい言及がある、参照。